

6月16日(金)21:00~放送 ダイジェスト

「週刊 宇野常寛のラジオ惑星開発委員会」

宇野 はい、東京有楽町から生放送でお届けしております宇野常寛のラジオ惑星開発委員会。  
今日は、民主党の衆議院議員の小川淳也さんをお迎えしております。引き続きよろしくお願ひします。

小川 こんばんは。

宇野 今日はですね、小川さんにニコ生民が聞きたいことをひたすら聞いてもらおうと思ひていて。小川さん用のムチャぶりスケッチブックを用意しました。

小川 これ、ムチャぶりするわけ。

宇野 ムチャぶりしていきますねー。これ見て下さい。お題は6つあります。1つめ、「政界再編の話」。ぶっちゃけ民主党この先どうすんのって話ですね。2つめは「地方の話」四国をどうしますかみたいな話ですね。3つめ「政治家の金銭感覚」ぶっちゃけ年収どれくらいあって、どう生活してんのかなことですかね。4つめ「政治家とインターネット」これちょっとさっきも話したような気もするな。5つめ「好きなエンタメ」、6つめは「好きな食べ物」(笑)。

小川 うんうんうん、なんか答えやすいものばかりでありますね(笑)。

宇野 いやー、ニコ生民舐めない方がいいですよ。結構コメントきますからね。はい、アンケートの結果出しましょう。

「政界再編の話」と「好きなエンタメの話」が五分五分！

全く同じ数字ですね。じゃあ、一個づついきましょう。まずは政界再編の話から。ぶっちゃけ、民主党どうするんですか？

小川 民主党は野党の軸になりたいと思ひています。

宇野 でもそれって、ほら、優等生的なトークじゃないですか。

小川 野党再編をやるんですよ。

宇野 小川さんって、民主党内だと前原(誠司)さんと近いんですよ。

小川 一番親しいのは前原さんですね。

宇野 じゃあもう民主党は割れるしかない。民主党を割って、維新の党の一部と、江田さんの結ひの党の一部と合流するとしたら、します？

小川 僕はそれを「殿、早まるな」と言っているんです。

宇野 早まんないんですか？　そこで合併しなかったら絶対勝てないじゃないですか！

小川 いや、小さく小分けして、小さいのが集まって中くらいのものを作っても、力にならないんで、やっぱり中ぐらいが集まって大きくするというのを理想に掲げています。

宇野 でも、僕はそういう話ってもうみんな聞き飽きていると思うんですよ。具体的にどうするのか、みたいなことだけが重要なんですよ。実際、どことは組めるけど、どことは組めないんですか？　共産党とは組めないでしょ？

小川 もちろん、共産党さんとは……。

宇野 社民党は世界から消えましたよね。

小川 いや、社民党は香川（小川さんの地元）で強いんですよ。

宇野 そうなんですわね。でも、マクロな意味で言うと社民党は世界から消えましたよね（笑）。

小川 まあ、国会の議席なら少なくなりましたね。

宇野 消えましたよね。滅んだ。

小川 いやいや。危ない、危ない（笑）。

宇野 じゃあ、どこと組むんですか？

小川 いま視野に入っているのは維新の会、結いの党……。

宇野 だから言ったじゃないですか！

小川 あとはみんなの党でしょ。宇野さんが、維新と一緒にするために民主党を割って前原さんが離党するぞって言うから、それはちょっと待てと。

宇野 なるほど、「前原民主党の傘下に入れ！」と。

小川 僕らが軸じゃないといけないと思っている。

宇野 前原さんが総理だと、人がついてこないと思うんですよ。前原さんがリーダーで、みんな納得するんですか？　僕すごく答えづらい質問していると思うんですけど。

小川 いいですよ。その、広がりが出るか幅が出るかっていうと、すごく課題は多いと思う。難しいかもしれない。今の段階ではね。

宇野 民主党は党を割らずにそれが出来るんですか？

小川 やりたいのよ。

宇野 じゃあ旧社民系を追い出すしかないじゃないですか。

小川 いや、出ていく人はいいよ。出ていく人はいいんだけど、追い出す必要はない。

宇野 みんなそう言うんですけど、現実的にはそうじゃないですか。なんで維新の党が結いの党と合流できたかという、石原一派を追い出したからですよ。

小川 そうそう、それはそうなんですよ。

宇野 よその党なら言えるわけじゃないですか。そういうことですよ？

小川 いや、あれだって石原さんが「分かった我慢する。橋下さんについていくよ。」と言え、追い出す必要なかった。石原さんが絶対に自主憲法だと、戦後の憲法秩序否定だと言って、橋下さんは我慢ならない。江田さんも無理だと言って分かれただけの話です。

僕は、石原さんが「俺はそういう気持ちだけど、そこまで言うなら分かったよ。しばらく辛抱するよ。」と言ってくれば、それでよかったと。そういうことなんですよ。小さく小分けすることは、やればすっきりするんだけど、いかに矛盾を抱えて同居できない人たちが一緒に住める大きなものを……

宇野 ちょっと小川さーん、止めましょうよ。

小川 やだ。

宇野 だって民主党ってそうやってダメになったんじゃないですか？

小川 それは、小沢さんもわがまま言ったから。最後に。

宇野 でもね、僕はこの本（小川淳也『日本改革原案』）をゲラの段階で読んでますよ。非常に、すごくスマートにまとまってると思います。僕はここに書いてあること八割五分くらい賛成です。でもこれって、たとえば維新の党の頭が柔らかい人とか、みんなの党とか、結いの党の政策通って言われている人たちの言っていることと、ほとんど変わらないんですよ。

小川 ここまではっきり言ってる人いないよ、他に。

宇野 各論レベルではほとんど変わらないけど、この本の存在意義って、僕は総合的なビジョンを出したってことだと思うんです。

小川 そうそう、そういうこと。

宇野 各論レベルでみると、じつはいままで政策通と呼ばれるような人が言ってきたことと同じなんですよ。でも、これをビジョンにして一冊の本にまとめたっていうのが、これまで無かったところで、この本のすごくいい所だと思っています。

小川 ありがとう！

宇野 この本を出した小川さんは、すごく勇気があったと。

小川 度胸があった。すごく悩んだもん。

宇野 これは小川さんの実直さがあったからこそ、出た本だと思いますよ。

でも、その一方で、2つ疑問があるんです。ひとつは、民主党の幹部クラスは、この本を政権にいる間、もしくは政権をとる直前、震災前に出せなかったことは間違いない。

小川 宇野さん、そこからいこう。それは、彼らにそれだけの見識があって、度胸がないと無理だから、無理。

宇野 僕はこの本を出せなかった理由は明確で、民主党がこの本のようなビジョンを出すくらいまで、舵を切れなかったということだと思っているんです。

小川 だって、考えてないもん。

宇野 いや、各論レベルではみんな考えていたと思うんですよ。

小川 つまみ食い的にはね。

宇野 そうつまみ食い。でも、それらをまとめて一つのビジョンを出すと、仲間割れになるから、出せなかったんじゃないか。

小川 いや一違うな。

宇野 小沢さん一派がいたら、絶対にこの本のようなことは飲まないんじゃないですか？

小川 うん、飲まないだろうけど。

宇野 この本を民主党の幹部クラスが出して、これが民主党の基本精神ですって言った瞬間に、小沢一派は大反発じゃないですか。

小川 小沢一派もそうだけど、たとえばここで何を書いているかっていうと、インターネットの（放送を見ている）皆さん驚かないでくださいね。社会保障費 20%カットします、合理化します。消費税 25%まで上げます。そうしないと、この先の日本はもたない、と言い切ってる本なんですよ。

これは、いまの幹部や、お年寄りに言えることか？

無理ですよ。でも、僕はなぜ言えたかという、政治家やるために政治家やってないからですよ。本格的に日本の構造改革に挑みたいと思っているから命がけで書いた。そういう意味では。出来ないよ、今の党幹部も他の野党も。誰が出来る？

これ。俺しか出来ないからやったんだ。

宇野 そこ僕は、本当に立派だと思うんですよ。でも、分かるんだけど、民主党はここまで踏み込んだことを言わなかったから、負けたと思うんですよ。

小川 今までの民主党はね。だから作り変える。俺たちの世代で。

宇野 でも、作り変えるときに結局、小さい所でまとまったらしょぼくなるから、呉越同舟でいいじゃんって言ったら、旧民主党と一緒にじゃないですか。

小川 違う違う。違うんだよ。アメリカ合衆国 50 州、なぜあんな一つの国で、なぜあんな異なる民族、異なる言語で一つの国でいられるか。いられるだけの辛抱と知恵を利かさなかったのが前の民主党。俺は違うんだよ。これから、そういう違う考え、多様性、いろんな方向観を一つにまとめる家を建てるんだと。一緒に住める大きな家を建てるんだと。日本の為に。それが俺の志だ。

宇野 じゃあ、自民党と変わらないじゃないですか。

小川 自民党は現世御利益だから。今うまくいって、票が取れて金が集まりゃそれでいいんだから。彼らは日本の構造改革に何も取り組もうとしてないじゃん。せいぜい法人減税、TPP。民主党が言って、出来なかったことばかりだ。彼らは現世御利益集団なんだから、俺たちのために、若い世代のために、本気で日本を変える気なんか無いよ。だから俺たちがやるんだよ。分かってくれよ、宇野さん！

宇野 熱いですね…！ それが分かっているから僕も今日呼びしたわけなんですけど。でも、そのときの手段が、民主党の昔ながらの大政党を取り戻して、呉越同舟で調子のいいやつとやっていくというビジョンが…

小川 分かるよ。議論は分かる。けど、国会で 241 議席取れないと、(『日本改革原案』に) 書いてあること、びた一文出来ないからね。俺は 241 議席取りにいくんだよ、何がなんでも。それはどんなに、思想、考え違うやつでもいい。だけど、そのときだけは黙っている訓練を積んでから、同じ家に住んでもらうよ。

宇野 僕がもう一つ問いたいのは、この総合的なビジョンが、2014 年というタイミングまで出なかったというところなんです。しかも、党の顔になるような人から出せなかった。この問題の背景には、民主党を中心とした新しいリベラルの支持基盤の弱さがあると思うんです。

今、小川さんは自民党のことを現世御利益だと言ったけど、僕は半分当たっていて、半分間違っていると思う。自民党の支持層の現世御利益というのも大雑把ですよ。自分たちの利益を具体的に守ってくれて言うてる農協とか、医師会とか、あぁいった中間集団に加えて、特に最近なのですが、自民党は都市の浮動票を上手く取っていますよ。

小川 小泉（純一郎）さん以降だよそれは。

宇野 いまの民主党って、どっちでも負けている気がするんですよ。戦後社会から育んできた旧来の中間集団への食い込みも、まあ連合とちょっと仲良くしたからちょっと足を引っ張られたくらいしかなくて、対メディア戦略が上手かったかというのと、鳩山さんを筆頭に最悪だったわけですよ。

小川 宇野さん、現状から言えばそうよ。俺たちもう、ニホンウナギ並のレッドリストに載っているような絶滅危惧種だから。あっちもこっちも連戦連敗。全部負けてるよ。でも、悲惨な、偉大なる敗北の中から、這い上がるよ。

宇野 そのとき誰が民主党の味方になるんですか。

小川 今の話でいうとまさに、弱い、緩やかな支持層を掴むしかない。政治的な利権とか特権構造から漏れた人だよ。一般生活者だったり、一般消費者だったり、一般勤労者。宇野さんは、そこを自民党がさらっているって言ったけど、その通りだと思う。だって、あんな3年間だったんだから。その人たちがお客さんで、残ってくれているはずがないよね。だから全部失った。

宇野 僕が、小川さんにネットを好きになって欲しいって言ったのはまさにそこなんです。自民党って、下野した3年間にもものすごい危機感を持ったと思うんですよ。たとえばさっき楽屋でもちょっと話したけど、僕は自民党の平（将明）さんと、結構仲がいいんです。あの人はもともと八百屋とかで、公募で自民党の議員になったんです。それで、自民党は東京選挙区で基盤を持ってなくて、選挙に弱いんですよ。だから、都市部の浮動票を取り入れないと、自分が勝てないんですよ。そういったリアリティーのもとに、対メディア戦略を非常にしっかりしている。たとえば彼がいまやっているのは、自民党の総裁選をいかに盛り上げるかということなんです。自民党の党員をネットで広く募集して、審査もすごく緩くして簡単に党員になれるようにして、自民党の総裁選っていうのは事実上の首相公選に近いものなんだっていうふうには宣伝して、盛り上げると。これはほんの一案だと思いますけど、ほかにもいろいろやってると。

小川 上手ですね。

宇野 こういうこと一つとってもそうなんだけど、本来、民主や維新が真っ先に、しかも5年前にやってなきゃいけなかったことだと思うんですよ。

小川 仰る通り。その通り。

宇野 なのに、小川さんみたいな43歳の現役議員がインターネット怖いって言うてるようじゃ、僕はダメだと思うんですよ。

小川 ダメよ。その通り。

宇野 本当に、そこを何かやってほしいなって思うんですよ。民主党はネットの若者の味方になれ、とまでは言わない。でも、新しい日本人の味方になってほしいんです。

小川 いいね！ 新しい日本人ってどういうコンセプト？

宇野 要するに、戦後的な中流文化からはぐれちゃった人たちですよ。たとえば、僕はもともと出版社っぽい企業に勤めていて、いまはフリーランスなんですけど、企業から外れた瞬間に、国民健康保険がすごい金額になるんですよ。そこそこの企業の社員じゃなくなった瞬間に、いきなり保険料が4倍とかになって家計に襲い掛かってくるんですよ。それぐらい今の日本っていうのは、特定の仕組みの中からこぼれ落ちた人に、すごく狭い所になっている。

そして、そういった人が、おそらく富裕層にも、低所得者層にもどっちにも増えていると思うんです。つまり、起業したり、フリーランスでバリバリ稼いでいるような人にも増えているし、逆に、地方だとまた全然違うと思うんですけど、東京で世帯年収が数百万っていう低所得者にも増えている。そういった、戦後の中流文化に乗りなかつた新しい日本人たちが現れていると思うんです。

小川 戦後の中流文化を担保する社会的背景も制度も崩壊しているからね。新しい秩序を作り直すしかないよ。それがこの本なんだよ。

宇野 だから、そういったところの味方になりますってことを明確に言ったとき、本当に連合とくっついている人たちと一緒にやれますか？ ってことなんです。

小川 宇野さん、いい質問。さっきの話に似ているんだけど、俺、この本を書いたとき、連合の会長のところに行ってきたんだよ。書くよと。雇用市場の大改革、真正面から書きますと。ここが大事なんだけど、連合ってもはや、大企業の正社員、宇野さんの言う、中流モデルに乗ったわずか17%の勤労者の声しか代弁していないんだよね。だからといって、連合切るんじゃないんだ。俺たちも変わる。連合も変われ。という、これをお互い言えるかどうか。で、宇野さんがこの本の勉強会に来てくれたときに、これから組合2.0が必要なんですよって言ってくれたでしょ。

宇野 言いましたね。

小川 俺、あの言葉に衝撃を受けたわけ。そう思ったけど、そう表現できなかった。同じようなことを、いま宇野さんが言ったようなことを、この本に込めている。いまご覧の皆さまをはじめ、ネットを見ている人に、俺はどのような言葉で伝えればいいんだろっていうところは、残念ながら解は見えない。見えないけど、やりたいことは詰まっているし、宇野さんの言う通りだし、それをどういう言葉、どういうツールで伝えていけばいいのかっていうのは、もう何段も俺は階段を上がらなければいけない。

宇野 僕は本当に思うんですけど、支持層も支持団体も、放っておいて出来るわけじゃないんですよ。僕は、実際に民主党主体で作るくらいでいいと思うんですよ。たとえばいまは戦後の中流文化からはぐれちゃった

せいで、クレジットカードもろくに作れないとか、不動産を借りるのも一苦労って人がいっぱいいるんですよね。だったら、そういった人たちの団体を作っていくとか。そういったことは大事なんじゃないかな、というふうに思うんです。

小川 団体を、目に見える形で。それは一つ、そうかもしれない。

宇野 そう、作っていくんです。連合とは違う連合、組合 2.0 みたいなものを作って行って、医師会とか農協に対抗できるような中間団体を政治主導で作るっていうシナリオがあってもいいと思うんです。

小川 いいかもしれないね。僕が一つ参考にしたいのは、北欧諸国は高負担、高福祉、高成長なのよ。ただし、あそこはあれだけ高負担だけど、高齢化率 10% 代なのよね。いま、すでに日本の高齢化率は 25% で、やがて 40% になるわけ。そこがゴールなんだけど、そのときに、宇野さんが言うように中流モデルに乗っかれば何とかやっていける、そうじゃなければ本当に食いつぶされるっていうのじゃなくて、雇用市場は相当流動的で、最低限のベースラインをすごく敷き詰めたものにしなければいけない。そのときに北欧では、組合がめちゃくちゃ良い役割を果たして、組織率が 70% を超えている。なぜかという、失業給付、職業訓練、職業紹介、フルセットで政府と組合が協力してやっているんだよ。俺は、あれは 21 世紀の日本の雇用市場なりの、一つのモデルだと思ってる。

宇野 いまは田母神さんの問題もそうで、テレビもそうだし、ネットもそうなんだけど、たぶんポピュリズムが問題になっていると。

小川 それは大衆迎合ってこと？

宇野 大衆迎合というか、ネットでうまく目立ったやつが勝つんだと。たとえば鈴木寛さんと山本太郎さんが東京選挙区で争った。僕は鈴木さんに投票しましたよ。民主党さんのね。

小川 ありがとうございます。

宇野 でも負けましたね。

小川 負けた。

宇野 あれって要は、ネット選挙とかやると、悪目立ちした方が票を集めやすいってことだと思うんですよ。それで、ネットで目立ちやすいのは、わりかし陰謀論系の人たちの方が、敵も作るけど味方もいっぱい作りやすいってことだと思うんです。田母神さんにも同じことが言えると思うんです。田母神さんを陰謀論だっていういろいろな問題があるかもしれないけど、わざと極論を投下して炎上をするような戦術の方が有効になってしまう。

小川 橋下徹さんもある意味そうだよな。



宇野 まああれは上手くいかなかったわけですけど。

小川 僕、地元のある支持者に「小川さん、八割の賛同者より、四割の味方だよ」って言われたことがあって。僕の前半10年の政治活動って、八割の賛同者、敵を作らないっていう感じで来ているのよ。ある意味、優等生っていうか、いい子っていうかね。でも、これからは、四割、三割ぐらいの敵を作っても、四割の味方固めるみたいなことはひょっとしたら必要かもしれない。

宇野 それはね、小川さんに向いてない気がする。

小川 そっか。俺も向いてないような気がする。

宇野 そういうことやるのは、橋下さんとか、田母神さんとか、そういったタイプですよ。山本太郎さんとかそういったタイプの人たちは、1万人の緩いアンチを作ると引き換えに、100人の狂信者のような、味方を作るっていうのが彼らの手法なんですよ。残念ながら、メディア主導の選挙、ポピュリズム選挙だとあれが強いんですよ。あれに対抗するときに、ポピュリズムにポピュリズムで対抗するっていうのは結構泥沼になっちゃうと思うんです。

小川 じゃあ何で対抗するの？

宇野 僕の考えでは、ポピュリズムの対義語って、中間集団による選挙、組織票なんですよ。自分たちの利益を代弁してくれる候補に皆で投票するっていうのが、ポピュリズムに対して1番のアンチなんです。でも、いまの日本の問題は、そういった組織票を動かせる中間集団が、某宗教団体とか、昔ながらの労働組合とか、医師会とか、そういった既得権益の団体しかないってことなんですよ。

小川 宇野さん、これちょっと聞いてみたいんだけど、ポピュリズムの対義語として、本質論っていうのは成り立たないかな？

時間もかかるし、瞬間的には到達できないんだけど、やがていろんな構造変化で皆が分かってきて、お尻に火がついて、本物を求め始めるときが俺は来るんじゃないかって希望があるの。

宇野 小川さん、それは本質論がポピュリズムで支持されているだけです。大衆は間違った選択をすることもあれば、正しい選択をすることも。ただそれだけです。

小川 うーん……そうか。

宇野 僕は、ポピュリズムの対義語っていうことだと、メディアに踊らされないというところだと思うんです。小川さんはちょっと嫌いかもしれないけど、現実の利益で投票する人たちだと思うんです。ちょっと変な見方かもしれないけど。

小川 現実利益も必要だよ。政治だから。

宇野 現実利益と理想というものが、ちゃんと――

小川 ミックスしてないといけないわけね。良いこと言うね！ その通りだ。

宇野 小川さんみたいなタイプには、もちろんネット嫌いになってほしくないし、ネットで若い層に訴えてほしいんだけど、その一方で、自分の味方を自分で作っていくことが合っているんじゃないかと思うんです。

小川 作為的にね。なるほど、勉強になった。

以 上